

本日は、看護学研究科の学位授与式に、ご来賓の皆様をはじめ諸先生方にご臨席を賜り、誠にありがとうございます。また、みなさまからのご懇篤なる励ましのお言葉を頂戴いたしまして修了生一同を代表して深くお礼を申し上げます。私たち修了生は、大学卒業後、臨床に身を置き、それぞれの看護実践の場で抱いた問いを解決すべく本学看護学研究科へ入学してまいりました。

入学当時、私は総合病院勤務を経て療育施設での勤務7年目でした。療育施設は年単位で障がいのある子どもたちが入所しており、同じ疾病名であっても個別性が大きく、その個性に合わせた看護が大切となります。24時間の生活すべてを支え、ゆるやかな成長へつながるよう多職種と協同で個別的な看護を実践する時、本学で学部生の頃から学び続けた「看護とは生命力の消耗を最小限にするよう生活過程をととのえること」という看護の本質を視点に、日々のケアの意味を取り出すことで自己の看護観を培ってきました。私はこの療育施設で学部生の頃、臨地実習Ⅱ、臨地実習Ⅲ、卒業研究を学ばせていただきました。対象に関わる時、子どもを取り巻く背景や家族も看護の対象だと自然にとらえられるのは、学部生時代に学んだことが土台になっていると考えています。急性期から転勤した同僚から療育施設での看護に意味を見出せないという言葉聞いた時、療育施設の看護は素晴らしいものだと伝えたいと強く思いました。

近年、障がい児施策は在宅支援拡充・地域で包括的に生活する方向性へと変換しており、常時呼吸器が必要な重症児であっても在宅での生活が可能となっています。そのような中、施設に長期入所している子どもは、障がいそのものより家族を中心とする環境要因のため在宅が困難な場合が多く家族への支援には背景理解が欠かせないと言われていています。短期入所やショートステイの子どもは、子どもの生活の基盤が家庭にあるため、親の育児に対する思いや子どもの生活調整への要望を強く伝えることが多く、看護者も生活過程を整えるための思いにできる限り沿いたいと考え個別的な関わりをしています。しかし、長期入所している子どもの親は要望を語る事が非常に少なく、子どもに対すること、親自身のこと、看護者に対する思いを十分表出できていないのではないかと考えました。そのため、それぞれの家族が抱える背景や、子どもに対する思いを明らかにし、親御さんへの育児支援を検討したいと考え看護学研究科に進学し、研究に取り組んできました。長期入所する子どもを持つ親御さんへのインタビューでは、障がいのある子どもを育ててきた過程での困難さや入所選択せざるを得なかった背景、離れていても親ならではの長期的視点で子どものゆるやかな成長を感じとっていることや、将来への思いを語っていただきました。施設に入所していても、在宅から継続している育児プロセスが明らかになり、望む支援を検討することができました。私たちが日々行っていることは、子ども達を通して親御さんに伝わっており、何気なく行っているケアを看護として意味づけしていくことが大切だと気づきました。

現在卒後17年目であり、職場では中堅看護師としての役割と責任もあります。それに加え、3才と9才になる子ども二人を育てながら三交代勤務をし、大学院に通い研究を行うことは簡単なものではありませんでした。時には宿題をする長男の横で授業の資料作りをすることもありました。しかし研究に取り組み自己の課題に対する意味を探求することは、大きな喜びを得ると共に看護観を発展させる契機となりました。

今後の私たちの使命は、本看護学研究科で得た学びをもとに、さらに研鑽しながら人々の健康と看護の発展のために尽力していくことだと考えております。

最後になりますが、インタビューにご協力してくださり気持ちを語って下さった親御さん方、私たちを励まし常に温かく多大なるご指導をしていただきました諸先生方、ご理解をいただき応援してくださった職場の皆さま、温かく見守ってくれた家族に深く感謝を申し上げます。本学のますますの発展と、諸先生方のご健康、ご活躍ならびに在学生の皆さまの一層のご健闘をお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

平成31年3月15日

看護学研究科博士前期課程修了生代表

大河原 真知子